

小学校の実践報告

1. いじめ事案に対する組織の実態・課題による目標設定

いじめ事案に対する 組織の実態	目標 (目指す組織像)	いじめ事案に対する 日常的な課題
・年2回のいじめアンケートと個別懇談を行っている。 ・定期的に校内教育支援委員会を行い、心配な児童の情報を交換している。 ・いじめを認知したとき、主任や管理職に報告し、組織的に動くようにしているが、職員一人一人のいじめの捉え方の違いから、報告をためらうことがある。 ・職員数が少ないため、児童の様子を常に複数人で見るのが難しく、児童が出す小さなサインを見落としやすい。 ・若い教員が多く、いじめや発達障害に対する適切な対応についての経験や知識が少ない者もいる。	・以下の3点について考え、共通理解し、本校職員の意識を高める。 ①いじめ発生の心配があるときの組織的な対応の在り方(児童への聴き取りや心のケア、管理職への報告、問題の解決方法、保護者への連絡方法など)。 ②児童の問題解決力を高めるための中・長期的な視野をもった支援の在り方。 ③いじめを早期発見・早期対処するために普段から必要とされる意識の在り方。	・児童間のコミュニケーション力が低く、感情のすれ違いから問題が小さなうちに解決できなかったり、いじめに発展したりすることがある。 ・いじめに発展した事案の背景に、当事者の発達障害や愛着障害などの要因が潜んでいる場合がある。 ・外国にルーツをもつ児童との文化の違いから生じた、ささいなトラブルがいじめに発展することがある。 ・いじめがあったと感じたときの適切な行動が分かっていない児童がいる。 ・児童の内面的な問題が未解決のまま、いじめが長期化することがある。

2. 研修のねらい（実践前）

【ねらい（研修を通じて伝えたいこと・組織に期待すること）】※箇条書き	時間の目安
・いじめ事案の初期判断についての合意形成を体験することで、「組織的対応の必要性」についての意識を高め、積極的に情報交換・組織的対応ができる職員集団をつくる。 ・「いじめ深刻化のリスク」や「いじめ判断の観点やポイント」などを共通理解し、今後いじめやそれに近い事案が起こった際に活用できるようにする。	60分

3. 研修の実践

実施日	機会（職員会議・担任会など）	活用事例
8月 19日 木曜日	現職研修	事例2(小②)
実施時間	参加者	
13:30～14:30 (60分)	全職員（非常勤、ALTを除く） 20名	

4. 工夫したこと（独自性）

・2週間前に「手順書」「各検討項目の留意点」「いじめ事案の初期判断のためのフローチャート」「初期判断と支援の方向性の例」を配付し、事前に読んでもらうよう依頼した。 ・1週間前に各グループの司会者と記録者とともに簡単な打ち合わせを行い、資料と映像を使って現職研修のイメージをもてるようにした。 ・ファシリテーターとして、意見が出しやすい雰囲気がつくれるように声かけや介入を心がけた。 ・先生方に内容が伝わりやすいように、ファシリテーターの言葉（録音以外の最初と最後の言葉）に少し変更を加えた。 ・学校全体でいじめ事案に取り組む意識を高めるため、教頭や事務職員にもグループに入ってもらった。

5. 実践して気が付いたこと（成功点と改善点）

- ・初期判断のフローを用いた個人の判断では、目安の1分間では短いようだった。たくさん意見が出たことで決められた時間では足りないグループもあったが、計画された時間で大きな問題はなかった。
- ・司会者の先生に研修の流れのイメージをもっておいてもらったことで、ファシリテーターとの受け渡しがとてもスムーズにできた。
- ・記録者の先生方に対して、事前に「記録者用資料」を渡しておいたことで、当日は余裕をもって記録に取り組むことができた。
- ・グループで行った判断の合意形成は、どのグループも意見が割れ、活発な話し合いとなっていた。
- ・ファシリテーターが司会を兼任するグループもあったが、特に問題なく進めることができた。

6. 参加者の声（『個人の振り返りシート』より）

- ・「被害感」について、いじめられていると思われる児童が自分の気持ちを素直に伝えられない場合、判断が難しいと感じられた。本人の気持ちを知ることは難しいが、大切な観点であると感じた。
- ・「深刻化のリスク」の3観点で事例について話し合うと、何が問題となっているか判断がしやすかった。
- ・担任が持っている情報だけでは「被害感」なしと判断したが、他の先生方の「我慢しようと考えている時点で嫌だと思っているのではないかな」などの意見により、苦痛を感じているのではないかと考え始めた。
- ・一人では情報収集に限りがあることや、見立てを迷うこと、間違えることもあるため、組織でいろいろな情報を収集し、判断することが大切であると感じた。
- ・情報を共有することで、自分の立場だけでの初期判断が変化する様子が見られた。さまざまな角度から児童の様子を見て、チームで情報を共有することは、児童に必要な対応をするために大切なことだと感じた。
- ・模造紙にまとめることで、情報収集したことがいろいろな立場の人に分かりやすいと感じた。身近に起こった案件もこのようにまとめていくと、初期判断がしやすく、深刻ないじめにつながっていかないと感じた。
- ・該当する児童の人間関係の相関図をつくることも、今後の対応を考える上で有効になるのではないかと感じた。
- ・役割が普段と同じ養護教諭であったが、保健室で気になる様子がみられたらすぐに共有したいと感じた。担任との共有がメインとなりがちだが、部活動顧問や学年主任、去年の担任など多くの教職員で対応していくことの大切さが分かった。
- ・模造紙いっぱい情報を出し合っても、まだまだ確かめたいことが出てきたため、担任一人で抱え込まず、チームで解決することがとても大切だと思った。
- ・小学校は、担任が子供を見る時間が圧倒的に長いため、担任が責任を背負い込みがちだと感じていた。だが、こうしていろいろな先生方と情報共有をして、いろいろな観点から話し合いができることは、担任としてはとても心強い。担任が声を出し、気軽に情報共有できる環境がどの学校でも整っていくことを願う。

7. 考察（感想、成果、今後の課題や組織への期待）

司会者や記録者の先生方と事前の打ち合わせをしたことで、時間を延長することなく60分で終わることができた。参加した先生方からは、活発な話し合いができ、多様な考えを知ること新鮮さを感じたようで、とても好評だった。この研修は対応策を検討しないまま終わってしまうが、消化不良のような「もやもや感」を訴える人はいなかった。それは、今回用いた事例がとてもよかったからではないと感じる。「本人の被害感」の「あり」か「なし」かについて、さまざまな意見が出され、とても活発な話し合いがされていた。今まで「こんなことで相談していいのかな」「声に出すのが恥ずかしい」と感じ、トラブルを一人で抱え込んでいた先生もいたと思うので、この研修が気軽に声を出せる雰囲気づくりの一助になったのではないかと感じる。先生方の振り返りから、今回のねらいは概ね達成されたのではないかと感じている。今後の教育活動で生かされることを期待している。そして、改めて同市の他校にもこの実践を広めていきたいと思う。